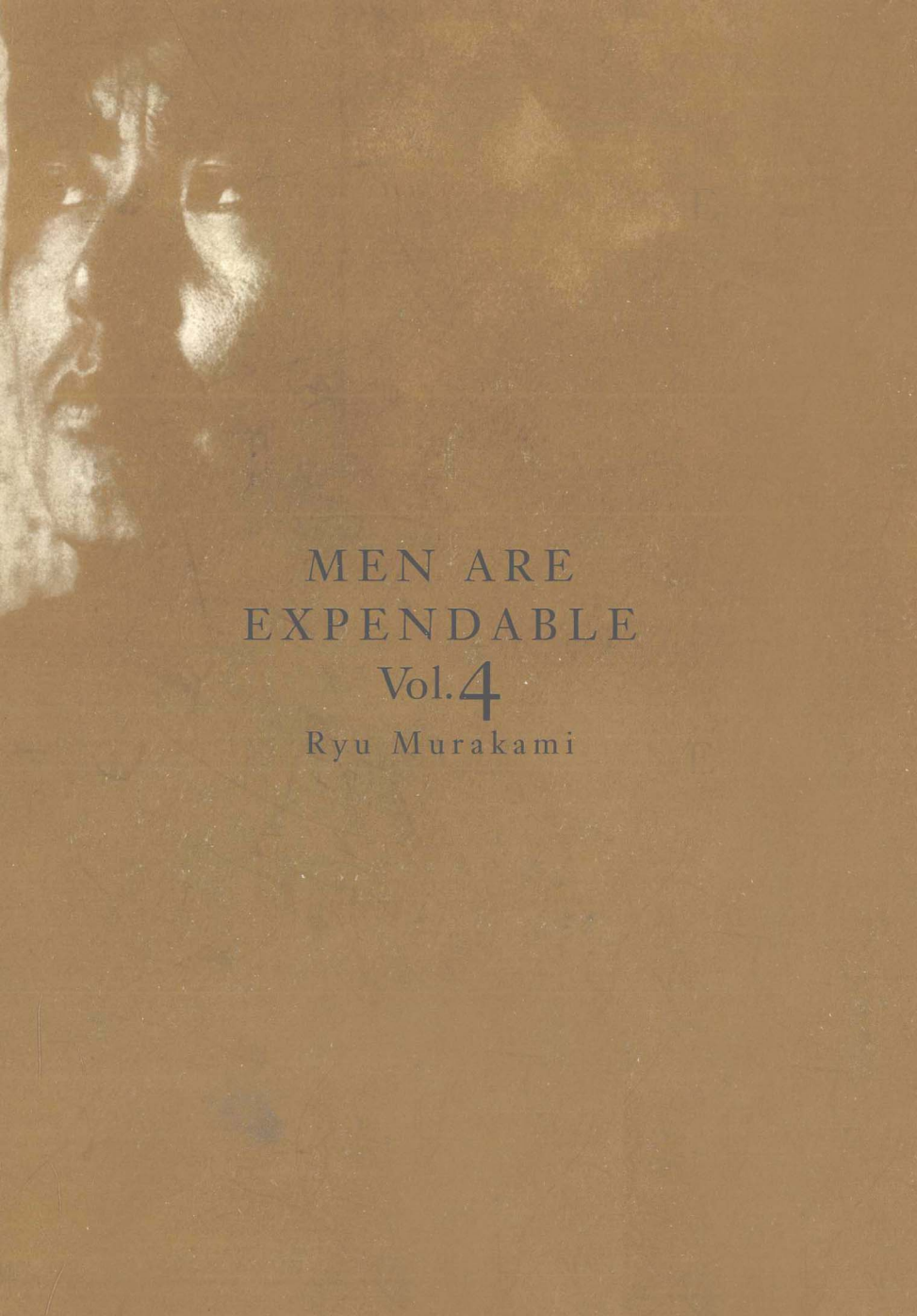




MEN ARE
EXPENDABLE

Vol. 4

Ryu Murakami

すべての男は消耗品である。

Vol.4

村上龍

MEN ARE
EXPENDABLE
Vol.4

すべての男は消耗品である。

Vol.4

一九九五年九月一五日初版発行
一九九五年十月二五日四版発行

著者——村上龍

©RYU MURAKAMI, PRINTED IN JAPAN, 1995

発行者——栗原幹夫

発行所——KKベストセラーズ

東京都新宿区西新宿七一二二一 電話〇三—三三六四—九一一

振替〇〇一八〇—六—一〇三〇八三

印刷所——大日本印刷

製本所——ナショナル製本

版下——三協美術

ISBN 4-584-18024-5 C0095

定価はカバーに表示してあります。乱丁・落丁本がございましたらお取り替えいたします。

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複製・複写（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作権および出版権の侵害になりますので、その場合はあらかじめ小社あてに許諾を求めて下さい。

すべての男は消耗品である。

Vol.4

／目次

その国の「ソフト」がその国を語る。 6

「どうしてそんなに元気なんだ？」キューバ人は答えた。「人間だからだ」 14

自分の家族がカンボジアへ行く、という想像力がないと、PKOの是非は問えない。

この国は美しいものを必要としていない。 30

この国にはソフトがない。 38

歌舞伎や能がなくなっても誰も困らない。 46

夜の街に出ることがなくなってしまった。 54

キューバは「他者」のシンボルである。 62

外国人にはこの国の「共同体」が見えない。 70

中上健次はきつとくやしかったはずだ。 78

傷(トラウマ)はいやすものではなく、それから自由になるべきものだ。 86

人生より映画の方が面白いに決まっている。 94

自分のトラウマを他人に見せるな。 102

映画は夢ではない。ビジネスだ。 110

「自分が見たいと思うものは全世界が見たがる」そう思うところから映画は始まる。 118

「内部調整」この国の歴史上の人物がやったことはそれだけだ。 126

「オレは必ずやれる」という意志と喜び、それを才能という。 134

『五分後の世界』を書いた。 142

消耗品であることを自覚せよ。それで少しメスから自由になれる。 150

今、はしゃぐような材料は何もない。 158

キューバにいと、「感傷」が発生しない。 166

ア・デイ・イン・キューバ 174

映画作りは、いつも絶望することから始まる。 182

NGラ・バンダは明日がわからない地平で音楽を作っている。 190

トラウマはサバイバルと進化の契機である。 198

信頼する人をがっかりさせることが、私は何よりも嫌いだ。 206

いよいよ『キョウコ』が始まる。 214

自分の欲望をコントロールして、人間は何も失わないのか？ 222

圧倒的な寒々しさを獲得すること、それが現在の私の課題である。 230

この国では「自分が無知であること」を誰も知らない。 238

『キョウコ』が始まった。 246

映画『キョウコ』のことだけを考えている。 254

ジン・ケリーの息子が移動車を押している。それがアメリカだ。 262

オウムの国の私 270

現状は想像を絶して暗い。だが出口が見えないわけではない。 278

挿画 ————— 安井寿磨子

表紙写真 ————— 片岡正一郎

ブックデザイン ————— 鈴木成一デザイン室

その国の
「ソフト」が
その国を
語る。

最近、といつても今だけなのかも知れないが、このページでエッセイを書くのが苦しくなってきた。

心臓が苦しいとかそういう意味ではなく、言葉を捜すのが億劫になつてきた。

それはモノ書きとして怠慢ではないかと言われそうだが、それとは少し違う。

このページではよく日本の悪口を書いた。

（「悪口」の方がいいな、批判とかじゃないから）

当り前のことだが、日本にいては、日本のことはよく見えない。

自分で自分のゴルフのフォームの欠点がわからないのに似ている。

で、昔は海外で、テニスやF1を見物するついでに日本のことに思いを馳せては、悪口を言った。

悪口は、少し言う分には気分がいい。

そして、いつの頃からか、「日本の悪口はもう止める」「そんなことしてる場合じゃない」などと書くようになった。

今、また少し違つてきた。

『トパーズ』がイタリアで夏から公開されて、最初、二館だけだったのが、十館に増え、今や全イタリアで四十六館でやつている。

大型のヒットだそうだ。

キューバの帰り、パリとニースでちよつとした仕事を済ませてから、ローマに行った。新聞や雑誌からインタビューを受けるためだ。

オレは、イタリアで受け入れられたぞ、と偉そうにしたいわけではない。

（本当は少し、偉そうにしたい）

インタビューでは、映画のことから離れて、現在の日本について、よく聞かれた。誰も日本のことを知らなかった。

それで、オレは別に日本のことを海外に向けて紹介しているわけではないのだが、日本のことなんか誰も知らないという事実と、私達は何でも知っているというこの国の脳天気さの落差に、啞然としていたのである。

「どうして日本人は、それも、ミシマ、タニザキ、クロサワ、ミゾグチ以降の世代は海外に向けて作品を発表しようとしなののか？」

なんて聞かれても、オレは別に日本代表ではないし答えようがないしと思ったが、それでも何かを言わなければいけないのだ。

「日本人は約一億人というすごい数の人があんな狭いところにひしめいていて、文学も音楽も映画もとりにあえず国内マーケットだけでやりくりができる。それが、一つあると思う」

なんて答える。

ヨーロッパなんて、EC全体で三億人を切っている。

地続きだし、例えばイタリア映画がイタリアだけでペイできるはずがない。

そういうことに、オレは『トパーズ』がなかったら永遠に気付かなかっただろう。

早い話が、世界に売れるソフトが、一部のアニメとファミコン・ゲームソフト以外、まったくない。

前から何度も書いている通り、オレ達はその国のソフトでその国を知る。

政治家の演説で知るわけではない。

イタリアの政治家なんて、シーザーとムッソリーニと暗殺されたモロしか知らない。でもイタリアのことは知っている。

完全な個人というのも考えられないが、完全な国なんていうものもない。どこだって矛盾だらけだ。

だから、その国のソフトはその国が抱いている矛盾というか、平たく言えばその国の人が何によって生きのびようとしているか何によって生きのびにくくなっているか、を語る。そのことをソフトが語らなくてはいけないというわけではなく、ソフトに自然と反映されるのだ。

だから、ソフトが外に出ていかないということは、とりあえずソフトが外に出ていく必要性を日本人が感じていないということになる。

別にどうだっていい、というわけで、それはけっこう楽しく生きているからだと思う。

そういう国でオレはなぜか苛立っているのだが、もちろんその苛立ちは小説や映画に向けられ、自分なりの方法論で一つずつ具体化しているので欲求不満なんかない。

ところがこういうエッセイになると、どうしても目下の関心事しか眼中になくなり、それは今キューバとその映画で、その地点から日本に目を向けると、余計なこと、つまり日本の脳天気ぶりに腹が立つことを、書いてしまいがちなのである。

不健康だ。

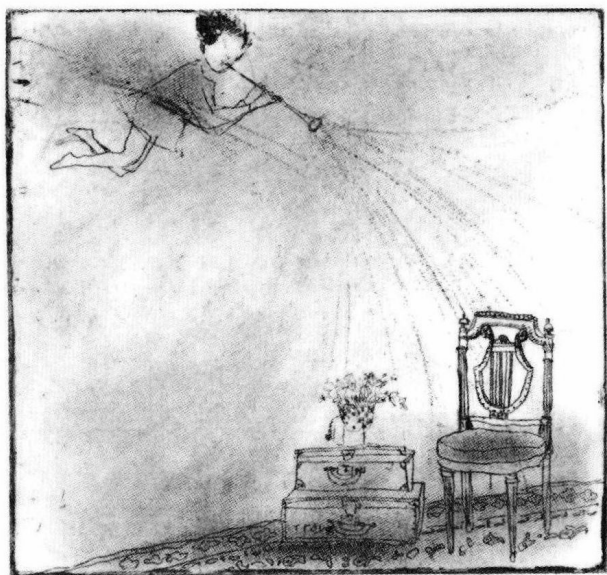
止めよう。

日本の閉塞感をエッセイにするのはよくない。

こういうのは、エッセイでは無理なのだし、長い論考にならざるを得ないのだ。

柄谷さんにまかせよう。

さて、イタリアでの映画『トパーズ』のヒットを冷静に考えると、ポルノグラフィではない日本のSMということで、多くのすけべで正直なイタリア人が見に行ったということだろう。



オレはいい気になんかなっていいない。

過去、「映画なんか止めろ」と、言われ続けたので（今でもけっこう言われている）、ちょっとやそつとのことでは、いい気になんかなれない。

だから、映画作りに関しては、悪口を言われ続けてよかったと思う。

（本当は、ものすごく頭に來てるけど）

あれだけ袋叩きにあつたので、何があつても警戒心が消えないのだ。

不安も消えない。

そして、映画を撮る意志が試され、きたえられる。

脚本を書く。以前言われ続けた悪口の数々を思い出す。

ムカツときて、その脚本を疑う。

こんなもんじゃだめなんじゃないかとまた考える。

女優のダンスレッスンを見る。

なかなかうまくなつたなと思うが、以前の悪口を思い出して、まだダメだ、ともつとレベルを上げようとする。

オレはどちらかと言うと、ほめられ、おだてられてその気になるほうだから、一人ですべてやれる小説では、「そう言えば誰かが天才だって言ってたな」とニヤニヤして、無謀な

挑戦をしたりする。

映画は一人ではできないので、不安状態がなくなってしまうと、あつという間に作品は失墜する。

それと、自分に何かがあつて、それを表現するんだ、なんて勘違いすると、もう一卷の終わりだ。

映画は、ある正確な、数学的な組み合わせの連続にすぎない。だから、警戒心がなくなれば、組み合わせに対する執着心も減って、見るに耐えないものに墮落していく。

常に不安でいるのも大変に辛いので、描く対象は、自分が好きなものでなくては、集中が続かない。

SMは好きだったし、キューバも好きだ。

好きな対象しか撮れないし、映画なんて、その監督が何が好きかということを見に行くのだ。

来年、『キョウコ』を撮るぞ。それしか頭にない。

『すべての男は消耗品である』のVOL3は、『トパーズ』のことばかり書いている。

それしか頭にない、という状態に、早くなりたい。

「どうしてそんなに
元気なんだ？」
キューバ人は答えた。
「人間だからだ」